

2021. 10. 24. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書1章21～28節
『新しい教えとは何か』

マルコは福音書の初めに、「イエスは誰と関わろうとしたのか」という命題を打ち出します。

本日の聖書の箇所は21節から始まる「汚れた霊に取りつかれた男」の記事です。時と場所は安息日の会堂です。マルコはイエスの活動の最初をユダヤ教の会堂に設定するのです。ここで教え始められたイエスの「教え」に人々は「非常に驚いた」といいます。なぜならば「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったから」(22節)だとマルコは記します。それはどういうことだったのでしょか。

当時、安息日の会堂で行われていたのは律法学者による律法解釈でした。簡単にいうとそれは「伝統から読み解く罪の所在」とそれに伴う「審きと救い」なのです。つまり、悪いことをしたら審かれるので善行を積みましょう。そうすれば救われるのですよという内容です。一見、「一日一善」みたいで良いものに思えがちですが、納得してはいけません。そこには積み残しがいっぱいあるのです。

ことに今日登場する汚れた霊に取りつかれた男などは、自分がハナから審きや救いから積み残されていることすら教えてもらえず、一筋の希望を求めて会堂に集っているのです。人の痛みを食いものにする当時のユダヤの現実が浮き彫りにされます。

それに対してイエスの「教え」はまったく新しいものだったのです。

マルコの時代はユダヤ戦争前夜のローマの抑圧強化によりユダヤの矛先は初代教会に振り向けられ、その結果、初代教会は地中海世界へ拡がりつつあった頃です。そんな時代背景もあって各教会には奇跡を断行する超常的なイエスの英雄譚がはびこっていたのは無理からぬ事でした。なぜなら奇跡物語は伝え易く共感を得やすかったからです。そこでマルコは奇跡物語の伝承に「教え」を付加して編集することを始めました。その行為は奇跡にまつわるキリスト理解に一つの抑制を加え、尚かつ奇跡物語の質を守ったのです。

マルコは新しい教えとしてイエスのあがないによる福音の到来を語りました。超常的な力に頼ったり、ましてや道徳や倫理、さらに救いや審きという一つだけの方法論に依存したがるわたしたちに、ただ「イエスの教え」を語るのです。そしてそれは、まったく新しい教えとしてのイエスのあがないなのです。

救いだけを語る宗教は人間を侮辱しています。審きだけを語る宗教は人間を過信しています。審きと共に救いを語る宗教は人間を甘やかしています。信仰において神が与えようとしているのは救いでも審きでもないのです。それは自分と他者、社会と歴史、そして何よりも自分の罪に向き合う明晰さなのです。

それは、わたしたちが安住しようとしてしまうその足許を徹底的に崩し、この汚れた霊に取りつかれた男のように、迷うべき本来の自分自身の姿を自覚させてくれるものなのです。

信仰の賜物とは何なのでしょう。何かを信じて迷いがなくなることでは決してありません。そうではなく、信仰とは正しい迷い方のことなのです。この迷いについてこそ語るべきが信仰なのです。おそらく迷いについて何も語らず、迷わないことに重きを置くような宗教とは宗教であっても信仰ではないのです。